



### 人権教育啓発ドラマ

(平成19年度ストーリー公募作品より)

企画・製作／大阪府教育委員会  
製作協力／(財)大阪府人権協会  
制作／東映株式会社



■キャスト  
前田 亜季  
朝加真由美  
和田はるか  
入木 将志  
佐川 満男  
■出演協力  
大阪府民  
の皆さん

# ホームタウン

## 朴英美(パク・ヨンミ)のまち



54分

VHS 94,500円(本体90,000円) [C#7285]  
※字幕版あり [C#7286]

DVD 94,500円(本体90,000円) [C#7287]  
※字幕版付き



東映株式会社 教育映像部

〒104-8108 東京都中央区銀座3-2-17  
<http://www.toei.co.jp/edu/>

## 製作のねらい

在日外国人が学校や社会で経験するさまざまな葛藤を描きながら、本名を名のり、看護師として前向きに生きようとする在日韓国人3世の姿を通して、名前や国籍の違いを認め合い、それぞれの生き方・考え方を大切にして相互に理解し合うことの必要性を学び、すべての人の人権が尊重される豊かな社会の実現について考えるきっかけとする。

## 話し合いのポイント

- 「やっぱり違うんですかね、私たちとは」と言った看護師の気持ちについて考えよう。
- 「本名で育てるかどうか迷ったんや」と言った英美の母の気持ちについて考えよう。
- 「その場合のおいしいドレッシングって何？」という英美の問いかけについて考えよう。

## あらすじ

大阪市生野区で生まれ育った在日韓国人3世『朴英美(パク・ヨンミ)』は、大阪市内の総合病院で働く新任看護師。

小学生の時に民族学級で学んだ英美は、両親の教えもあり、本名を使うことは当然のことと思っている。

ある日、英美は、就職で大阪へ来たばかりの患者から「在日の方と会うの、初めてなんです」と屈託なく言われる。

その夜、英美は、「本名を名のりたくても名のれない在日韓国・朝鮮人がいる」ことを両親から聞く。

英美が担当する高齢の患者(垣内忠雄)は、英美が在日韓国人であることを知り、問いかけても返事をしなくなる。

垣内の娘(陽子)が親の反対を押し切って韓国人と結婚し、その後、絶縁状態になっていたのである。また、先輩看護師の「韓国人やけど、よう頑張ってる」という言葉に、英美はさらに傷つく。

数日後、保育園児のマリアが男児ともみ合い、頭を打って入院する。フィリピン人の母エリーが、言葉の問題で日本人の保護者と打ち解けられず、マリアもいじめられるようになっていた。英美は、思いを十分に伝えられていないことが原因と気づき、真紀(英美の友人、保育園で働く保育士)とともに何か行動を起こしたいと考える。

垣内の手術が近づき、英美は韓国で暮らす陽子に電話をかける。病状を知った陽子は、夫と子どものミョンへとともに病院に駆けつける。しかし、垣内は英美に「余計なことを・・・」と大声を出し、陽子は落胆する。

垣内に会うのを楽しみにしていたミョンへは、一人で垣内の病室へ行き、「おじいちゃん」と呼びかける。垣内と会える日のことを考え、日本語も教えながらミョンへを育てたスン Chol(陽子の夫)の思いを知った垣内は、韓国・朝鮮人に対する自らの偏見に気づく。

真紀がエリーのために企画したアジアン・フード・パーティには、保育園児やその保護者など、多くの人に参加し、エリーの夫も駆けつける。フィリピンへの帰国を考えていたエリーは、「もう少し日本にいる」と真紀や英美に伝える。

パーティが終わり、帰って行く人たちを見送りながら、英美は母に「ずっと守ってくれてありがとう」と言い、母は「あんたがあんたらしく生きられれば、オンマはそれでいい」と応え、2人はうなずきあう。